

第1章 学校における実践的研究

第1節 教育実践と教育研究

1 教育研究の必要性

教育実践の質を高めていく大きな推進力

学校は、子供のよりよい発達を促すために、組織的・計画的・継続的な教育を行う場である。したがって、学校の役割は、子供が時代を超えて変わらぬ価値あるもの、すなわち基礎・基本や、時代の変化に対応して生きる力を身に付けるための支援をすることである。

教師は、子供に育成したい資質や能力を、「子供の成長への願い」としてもち、日常の教育実践を向上させようと努力している。この教師のもつ「子供の成長への願い」を実現するためには、日々の教育実践を客観的に問い直す必要がある。

これらを踏まえ、教育研究は、日々の教育実践の中から課題を見だし、その解決に向けて追究を行うことである。追究の結果は、まとまった知識や理論として蓄積される。研究によって導き出された知識や理論は、一人一人の教師の主體的な吟味・選択によって、教育実践に方向性を与えていく。このような研究の展開によって、教師は、実践を客観化し、向上させることができる。

教師が教育研究に取り組むことは、「子供の成長への願い」を実現するために、教育実践の質を高めていく大きな推進力になるのである。

また、教育研究は、それが、単に個々の教師と当該学校の変革を図るだけでなく、現実の子供と教師の諸条件に適した様々な創意工夫を、ほかの多くの学校や教育関係者に提言することなどにより、教育全体に寄与するものに

もなる。教育の在り方が問われているこの時代に、教育実践に生きる教育研究の重要性や必要性はますます高まっている。

2 教育研究とは

課題を明らかにし
方策を導き出す

学校において行われる教育研究とは、教育実践の質を高めていくためのものである。そして、子供の成長への願いを実現するために、どのような課題があるか明らかにし、課題を解決していくための方策を導き出していくことである。

3 教育研究の方法

学校における教育研究は、一般的には、次のような方法がある。

- 授業研究：授業の改善・充実を図るために、指導の内容や方法を導き出すもの
- 教材開発研究：授業の改善・充実を図るために、教育実践に役立つ教材の開発を行うもの
- 事例研究：教育の内容や方法の改善・充実のために、事実から問題の原因や要因など、解決・改善の手がかりを明らかにするもの
- 調査研究：教育の内容や方法の改善・充実のために、教育の事実や実態を分析し、提言を行うもの
- 理論的研究：自己の教育理論を裏付けるために、文献を基にまとめるもの
- 実験的研究：教育の内容や方法の改善・充実のために、要因の比較実験によって、その有効性を確かめるもの

4 教育研究を推し進めるもの

(1) 深い愛情と豊かな構想力と確かな技術

教育研究を推進するには、教師の子供に対する深い愛情と、研究に対する豊かな構想力と確かな技術が必要である。

まず、子供に対して深い愛情をもつことである。教育は人間形成という価値創造、しかも未来からの要請にこたえながら、現実を踏まえ、価値追究を

目指して展開される。何のために何を研究し追究するのかといった、価値を鋭く吟味し、研究の中でエネルギーとして爆発させていくのである。たとえ、それがどのような小さな研究であってもよい。そこに、教育の本質である人間形成を豊かに実らせていくための英知や価値を込めていくのである。子供を見つめ、社会や時代の動向や課題を把握し、過去と未来の接点に立って深く思索し、子供に対する教師の深い愛情を結晶させて、研究に生命と魂を与えていくのである。

次に、豊かな構想力である。これは、研究課題を解決するために、どのような計画を立て実施していったらよいか考え、組み立てることである。研究の対象を絞り、研究の目的や内容を限定し、研究の方法を吟味し、研究が密度の濃い展開になるように、研究の構想を創意工夫し、十分に練っていくことが大切である。

最後は、確かな技術である。研究の構想を実現するために、検証や結論の導き出し方を十分に検討し、様々な研究技法を適切に活用し、データ解釈の手順や方法の筋道を立てて進めていくことが大切である。

(2) 共同研究におけるチームワーク

特性を生かして、
主体的に研究に参
画する

学校における教育研究は、教師集団の多様な人間関係の中で教育実践を進めながら共同して行うものも多い。その中で、教師集団の研究への意欲の高まりは、学校をみずみずしくよみがえらせていく。研究はそうしたエネルギーをもっている。そのように研究を推進するため、また、研究推進上の障害を克服していくための要として、チームワークが大切である。

研究は、もともと自主性や創造性を原点とする。そこで大切なことは、一人一人の教師が自己を確立し、主体性をもって研究に積極的に参画していくことである。子供の成長・発達をみんなで支援していくという自覚と、研究を通して教育にかかわる課題を解決していくという使命感をもち、共通基盤をもって研究を進めるとき、チームワークが生まれる。

研究推進に当たっては、教師一人一人が特性を生かして、主体的に研究に

参画し、責任をもって役割を果たしていくことが肝要である。そのために、教師同士が互いの特性を認め合い、自信をもって取り組むことが大切である。

また、こうした取組は、リーダーの資質によるところが大きい。リーダーは、絶えずメンバーが研究への意欲を燃やし、創造性を発揮できるよう、一人一人の研究意欲への動機付けに心がけることが大切である。リーダーの綿密な企画力や適切で時宜を得た決断力、豊かな人間性などによって創造的な研究集団となっていくのである。このような教師群によって研究が進められることにより、豊かで充実した学校が創造されていく。

それとともに、常に配慮していききたいことは、研究の成果を実践に役立つようにフィードバックしていくことと、学校の研究的雰囲気醸成に向けて、最適な条件整備を心がけていくようにすることである。

このように、教師一人一人が特性を生かして、チームワークをもって研究を推進することが大切である。

本書では、学校において個人研究に取り組む場合を中心に述べ、必要に応じて共同研究に取り組む場合を取り上げて述べる。

第2節 実践的研究のとらえ方

I 実践的研究とは

教育課題の解決と
教師の資質や実践
力の向上を目指す

学校において行われる実践的研究は、教育課題の解決を目的に、教育実践にかかわる問題を取り上げ、教育の内容や方法についてどのように工夫するか考えていくことである。そして、得られた理論や方法を基に、実践をさらに高めていく。これは、子供の成長への願いを基に、その実現に向け教師としての資質や実践力を高めていくための取組ともいえる。このような過程において、新しい気付きや深まりを生かしながら研究を進めていくのである。

これらのことから、学校における実践的研究の特質が、次のように浮き彫りになってくる。

- 子供の変容や成長にかかわる研究である
- 実践と理論を結び付けた研究である
- 教育実践の質を高め、その方向付けを行う研究である
- 研究の深まりとともに新しいことに気付き、修正を加えながら進めるというように可変性、柔軟性のある研究である

この特質と前述した六つの研究方法との関連は、表1のようになる。

表1 学校における教育研究の方法と実践的研究の特質の比較

研究方法的な特質	子供の変容や成長にかかわる	実践と理論を結び付けた	教育実践の質を高め、その方向付けを行う	可変性、柔軟性がある
授業研究	○	○	○	○
教材開発研究	○	○	○	○
事例研究	○	○	○	○
調査研究	○	○	○	○
理論的研究	○	—	○	—
実験的研究	○	○	○	—

本書では、この四つの特質からとらえて、前述した六つの研究方法のうち、授業研究、教材開発研究、事例研究、調査研究を実践的研究ととらえる。

第2章では、この四つの研究方法を具体的に取り上げ、その過程や方法を示していく。(表2参照)

表2 本書で取り上げる実践的研究の研究方法

研究方法	特 質
授 業 研 究	学習指導の内容や方法について実践を通して研究し、より客観的（論理的）に課題を解決していく
教材開発研究	教材開発の有効性を実践を通して研究し、教材の在り方を客観的に明らかにする
事 例 研 究	特定な事実について資料を収集することにより、問題の原因や解決・改善の手がかりを明らかにする
調 査 研 究	事象等の傾向・要因を明らかにするために調査を行い、結果を分析し、考察することにより、教育方法等の改善の視点を提言する

II 実践的研究の必要条件

1 多様性を踏まえた洞察と価値の吟味

きめこまやかな洞察と教師の価値判断

教育は、様々な要因が複雑に絡まっているため、自然科学のようにはっきりした因果関係や法則性が成り立っているとは言い難い。例えば、学力を規定している要因に視点を当てた場合、意欲、能力、性格、学習や生活環境など、様々なものが絡み合っている。

このように、教育の背景にある要因の多様性を踏まえ、複雑な現象に注意し、きめこまやかな洞察を加えながら研究を進める必要がある。

また、例えば、学力について、その内容のとらえ方が教師の「教育観」「学力観」「教材観」「子供観」によって異なるように、実践的研究においても、教師の価値判断が大切となる。このように考えるとき、研究が子供の成長に真に役立つものか、今日的な教育課題にこたえるものになっているかと

いった価値の吟味を十分に行うことが大切である。

2 「一般性・法則性」と「個別性」の追究

科学的、論理的であるとともに、内面や個性的な特徴を洞察

教育研究にとって大切なことは、科学的、論理的に一般性・法則性を追究することである。しかし、実践的研究において、すべての子供を包括してとらえるようなことだけでは意味がない。言うまでもなく、一人一人の子供の発想やものの考え方には個性がある。子供の発達は、心理学で説明されているような枠組みを一般的にもっているにしても、一人一人の子供では、その違いが大きい。したがって、実践的研究においては、「一般性・法則性」と並んで「個別性」の追究を忘れてはならない。特に、個性を生かす教育の充実が求められている現在、子供の内面や個性的な特徴を洞察していくことが大切である。

3 倫理観と普遍的な愛に根ざして

人間形成の願いと期待の心

実践的研究は、子供の人格の尊重を基盤にして行うことが大切である。効率主義一辺倒の考え方から、画一的で結果だけを尊重し、子供に自信を失わせるような研究であってはならない。また、子供を実験的に扱うような研究態度は厳に慎み、一人一人の子供に対し、人間形成の願いと期待の心をもって、教育への厳しい倫理観と子供への普遍的な愛に根ざして研究を進めることが大切である。

III 実践的研究の構想

立ち止まり、先に進み、立ち返って考える

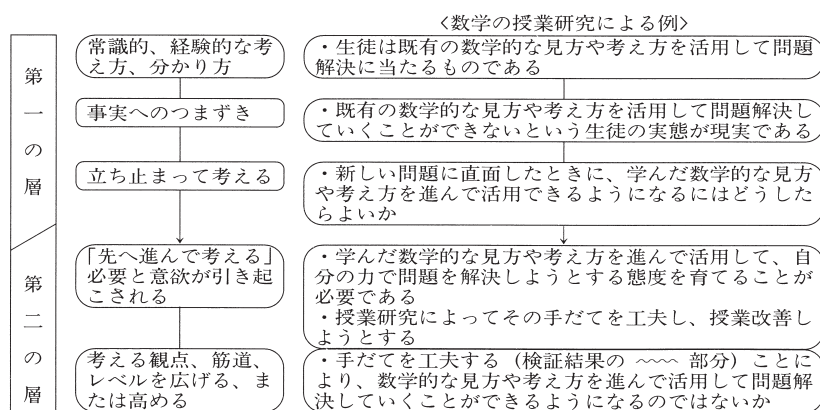
実践的研究はどのような過程をたどるのか。高久清吉は著書『教育実践の原理』の中で、「研究とは『考える』『わかる』の前進、または深まりの過程である」と述べている。高久はこの過程について、次のように論述している。

『第一の層は主客未分化の前反省的段階である。「ただ、なんとなく」という常識的、経験的な考え方、わかり方が大きくものをいい、「あたりまえのこと」と思いこんでいるものを改めて問題にしようとする問題意識や反省的思考が生まれにくい。このような日常的な考え方や分かり方がくずれるのは、事実につまずくときである。これまで、「はっきりしている」、「あたりまえのこと」とばかり思いこんでいたものが、実は案外にそうでないと気づいたとき、人は「立ち止まって考える」。ここから本当の研究が始まる。

第二の層は、主客分化の反省的段階である。つまりいて立ち止まることから、いままでわかりきっているとひとり合点していた事がらや問題について、さらに「先へ進んで考える」必要と意欲が引き起こされる。ここでいう「先へ進んで」の意味は、常習的な考え方の型やわだちの壁を破って、考える観点、筋道、レベルを広げる、または高めるということである。これによって、自我は「離れて」対象を見ることとなる。つまり、事がらや問題の正しさについて、客観的（論理的）な吟味を加えることとなる。

第三の層は主客が実践的なレベルで再び結びつく反省段階である。ここでは、先へ進んで考えることから、改めて自分自身へと「たち返って考える」ことになる。前段階での客観的な吟味の結果が、結局は「自分は……すべきである（……しなければならない）」という形で、研究者自身の実践上の選択と決定を方向づけ、さらに行為を動機づける意識の力となって内化される。前段階で分化した主客は、主体のはたらきとなって再びより高い次元で統一される。』

高久の研究における三つの層を授業研究に当てはめてみると図1のように示すことができる。(p.188実践例5参照)



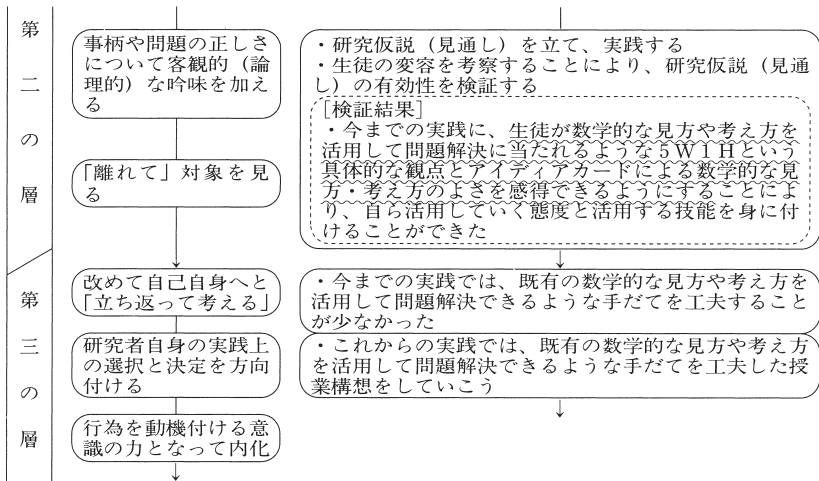


図1 授業研究における思考の過程

この考えを手がかりに、実際に実践的研究を進めていく過程を構想し、まとめたものが図2である。



図2 実践的研究の構想

第3節 実践的研究の過程

I 研究課題をどう設定するか

1 研究課題設定の意義

実践上の問題を見
いだし焦点化する

研究課題の設定は、日常の教育実践の実態や子供の成長への願いから実践上の問題を見いだし焦点化して課題の解決を目指した具体的な取組を行うために意義あるものである。

- 共同研究を行う場合に研究課題を設定することは、前述したことのほかに、次のような意義がある。
 - ・学校が解決しなければならない課題を取り上げることにより、成果を教育課程の改善、学校経営や学習環境の整備等に生かすことができる
 - ・望ましい授業の在り方や指導方法の工夫などについて共通理解することができ、自校における指導の在り方を明確にすることができる
 - ・共通な視点で子供を見ることにより、様々なとらえ方ができ、子供理解が多面的になる
 - ・課題の解決に向けて、全教師が共通理解の下に教育実践を行うことにより、参画意識を高めるとともに、協働態勢を整えることができる

2 研究課題設定の手順

研究課題は、次のような手順で設定することができる。

(1) 問題を発見する

ア 問題意識をもつ

子供の成長への願
いと教育実践との
ずれから

教師は、子供に対して、「自ら進んで学習に取り組もうとする意欲を育てたい」とか「確かな思考力、判断力を培いたい」など、子供の成長への願いをもって日常の教育実践を行っている。

しかし、日常の教育実践にみられる子供の実態を振り返ってみると、教師のもつ子供の成長への願いと教育実践の間にずれのあることに気付き、問題

を意識することとなる。このように意識された問題は、多種多様なものがある。

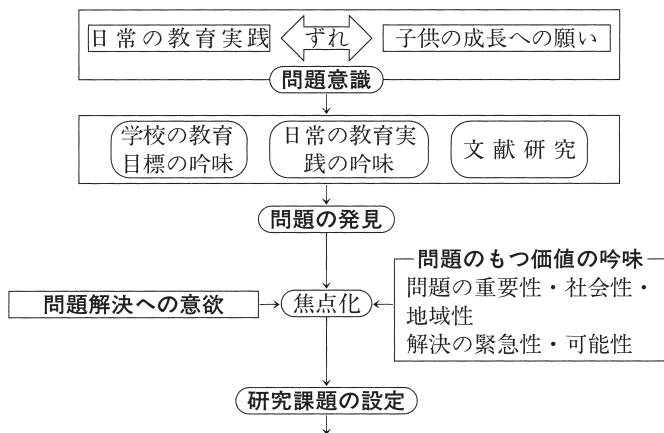


図3 研究課題設定の手順

イ 問題を発見する

日常の教育実践や学校の教育目標などを吟味して

問題意識は、実態をより具体的にとらえようとしたり、子供の成長への願いをもっと明確にしたりしてみようという気持ちを高めていく。

すると、それまで「あたりまえと思っていたこと」や「何となく行っていたこと」など、常識的、経験的な考え方、分かり方に疑問をもつことがある。この気持ちが問題を発見しようとする切実感へ向かわせるのである。

問題を発見するためには、子供の成長への願いを基に、日常の教育実践の実態をより具体的に把握することが大切である。そこで、日常の教育実践や学校の教育目標などの吟味の必要性が生まれる。

表3は日常の教育実践の吟味の例である。ここでは、問題意識の対象を日常の教育実践という視点から吟味する例を挙げた。それ以外に、文献研究や調査によって、実態を見直したり、子

表3 日常の教育実践の吟味(例)

方 法	主な考察の内容と技法等
○教材研究	○学習目標、教材の特質等の教科の理論など
○研究協議	○教育目標の理解、授業研究など
○教師間の交流	○日常の教育論議

供の成長への願いが明確になったりして、問題を発見していく方法もある。

- 共同研究を行う場合には、全教師がそれぞれもっている子供の成長への願いを出し合って、共同して解決していく価値ある問題を発見していくことが大切である。そのために、KJ法、ブレインストーミング法などの技法を用いて、次の①～③のようにして、価値ある問題を発見できるようにする。

- ① できるだけ広い視野にたつて、たくさん問題を書き出す
- ② 書き出された問題を分類・整理したり、相互関係をとらえたりして問題を構造的に把握する
- ③ 中核的な問題として価値あるものを選択する

(第3章参照)

(2) 問題を焦点化する

ア 問題のもつ価値の吟味

視点をもって価値を吟味する

発見した問題は、次のような点から、その価値を吟味することが大切である。

- 問題の重要性はどうか
 - ・問題を解決することによって、子供がどのように変容するか
 - ・変容の内容と方向に、他の問題を取り上げるよりも大きな価値はあるか
 - ・各問題の相互関係をとらえたとき、その問題は中核的なものとして価値があるか
 - ・問題の解決が教師の指導力など、資質の向上にどのように寄与するか
 - 問題の社会性・地域性はどうか
 - ・社会の要請にこたえるものであるか。また、地域の課題としてふさわしいものか
 - 問題解決の緊急性はどうか
 - ・子供にとって、早急な解決を迫られているものか
 - 問題解決の可能性はどうか
 - ・問題を解決することができる大きさであるか
 - ・研究にかけられる時間を考えたとき、解決することができるものか
- 共同研究を行う場合には、上記のほかに、教師全体の参画意識を高め、協働態勢を図っていくことを通して、共同して解決していく価値あるものを、次のような点から焦点化していく。
- ・教師全員が研究にかかわっていける問題であるか
 - ・教師一人一人が、自分の課題としてとらえることのできるものか

イ 問題解決への意欲

子供の成長への願いを原動力に

発見した問題に教師自身が解決の意欲をもっていなければ、追究していく原動力が生まれません。子供の成長への願いが、発見した問題を解決したいという意欲につながったとき、それが教師にとって研究したい課題として意味をもってくるのである。

ウ 今日の教育課題からの吟味

追究すべきことを明確に意識する

問題意識によって発見した問題は、どのような意味や課題を抱えているかという吟味を加えることにより、追究すべきことが一層明確に意識されていく。吟味は、日常の教育実践を客観的に検討したり、今日の教育課題を視点に行ったりしていく。

今日の教育課題は、小（中）学校学習指導要領（平成10年告示）の改訂の基本方針で示された、これからの子供に育成すべき資質や能力と、それを育成するための学校の在り方を基にとらえることができる。図4は、基本方針を基に今日の教育課題をとらえた例である。

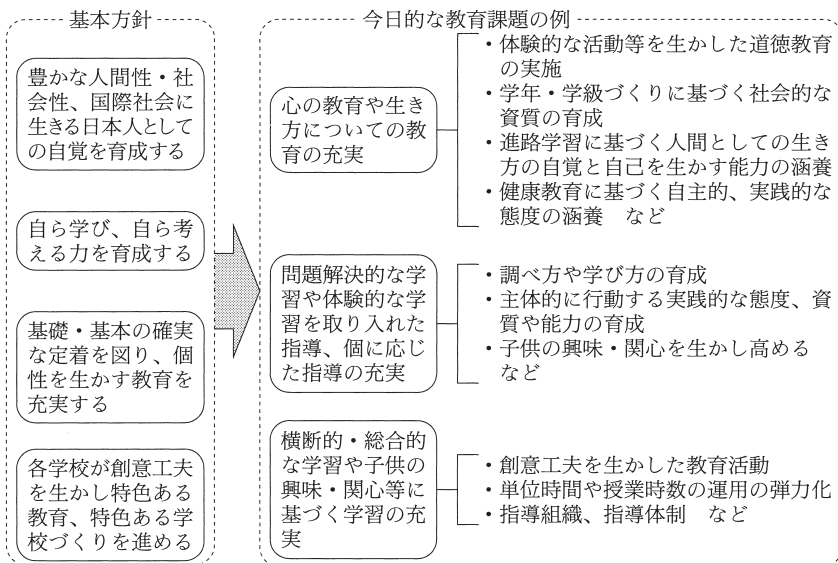


図4 基本方針と今日の教育課題の例

エ 研究の分野・領域を確認する

どんな角度から研究に取り組むか

問題を吟味していくと、研究として取り上げようとするのが、教育課程や学年・学級経営などの教育全体の改善なのか、指導計画、授業づくり、教材開発など、学習の過程や方法などの改善なのか、子供へのかかわり方や支援などの改善なのかが見えてくる。このように、どのような角度から研究に取り組んでいったらよいかが見えてくることにより、実践的研究の方向が定められ、内容が焦点化され、研究課題がより明確になっていく。そして、これから追究しようとする課題が教育活動のどのような分野・領域に位置しているかを見通すことができるのである。

(3) 研究課題を設定する

価値や解決の意欲などから焦点化

発見した問題は、問題のもつ価値や教師自身の解決への意欲などから焦点化し、研究として取り上げる課題として設定することになる。

II 研究推進計画を立てる

1 研究推進計画の意義

研究の全体を見通すために

研究推進計画は、研究を「どの程度」「どのように」進めるかという計画を立てることである。したがって、研究を進めるに当たり全体を見通すために、意義あるものである。

2 研究推進計画立案の手順

研究推進計画は、基本的には以下のような手順で立案することができる。

(1) 基本的な手順

ア 具体的な研究方法を選択する

研究課題にどのような研究方法で取り組むか、単一の方法で可能か、複数の方法が必要かを見通す。

イ 研究に必要な期間を確認する

研究課題を解決する期間がどのくらい必要か見通す。研究の目的によっては、あらかじめ研究期間が限られている場合もある。

ウ 作業の目標、内容、方法を確認する

研究過程の各段階の計画を立案する前に、次のような点を明らかにしておく。

- ・各段階の達成目標を明確にする
- ・各段階で取り組む研究の内容や方法とそれに伴う作業を洗い出す
- ・作業に要する日数を算定する

ア～ウは、複数年で行う場合も考えられる。

研究推進計画は、各段階の作業内容とその方向性が明確に示せるようにする。

表4 研究推進計画（例）

月	段階	流れ	作業の目標	作業内容	作業方法
4・5	課題の設定	※フローチャートで示す	・問題の発見 ・問題の焦点化 ・課題の設定	・子供の成長への願いの確認 ・教育上の諸問題について吟味し、実態を把握する	・文献研究 ・調査

(2) 複数年に及ぶ場合の研究推進計画立案の留意点

研究が複数年に及ぶ場合には、子供を視点に成果や課題を1年ごとに明確にし、それを基に累積的に研究を深化・拡充・発展できるように計画することが大切である。

複数年に及ぶのは、次のような場合である。

ア 同じ課題を複数年にわたって追究する場合

1年の研究の結果、仮説を修正したり、問題点を修正したりしながら研究する場合と、そのまま研究を継続的に行う場合とがある。

イ 同じ課題を年次ごとに領域・内容を分けて追究する場合

年次ごとに追究した領域・内容を全体として一つにまとめていく場合と、前年の研究成果を生かして、毎年研究の領域・内容を替えながら行う場合とがある。

ウ 複数の課題を年次ごとに発展的に追究する場合

いくつかの実践事例などを累積して、最後に改善した方策を提言していくような場合である。

- 共同で研究推進する場合に、研究推進計画を立案するときは、次の点に留意する。
 - (ア) 研究方法は、課題によって複数選択することがある。その際、班別で並行して研究推進したり、複数の研究方法を順序立てて取り組んだりする
 - (イ) 研究に必要な期間は、単年度で行うか、複数年度で行うか、共通理解して定める
 - (ウ) 研究組織を編制するに当たっては、以下のような点に留意する
 - 校務分掌の組織を生かし、学年、教科、生徒指導等、相互の有機的な関連を図ること
 - 研究主題によって、効率的な編制を考えること
 - 教師の特性、個性、能力を生かす組織であること
 - 研究の内容や学校規模を配慮し、研究推進委員会を位置付けるなど、全体と各々が協力し合える組織となるようにすること

III 研究方法の特性

研究方法の特性として、仮説を立て検証する場合と事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合が考えられる。

これを日常の教育実践を基に示すと図5のようである。

1 仮説を立て検証する場合

研究仮説で取り上げた内容や方法によって課題解決

実践上の課題をより客観的・論理的に解決していく方法として、仮説を立て検証する場合がある。仮説を立て検証する場合とは、研究課題をどのような内容に

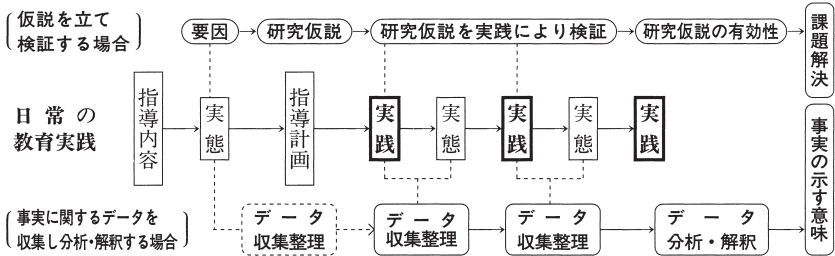
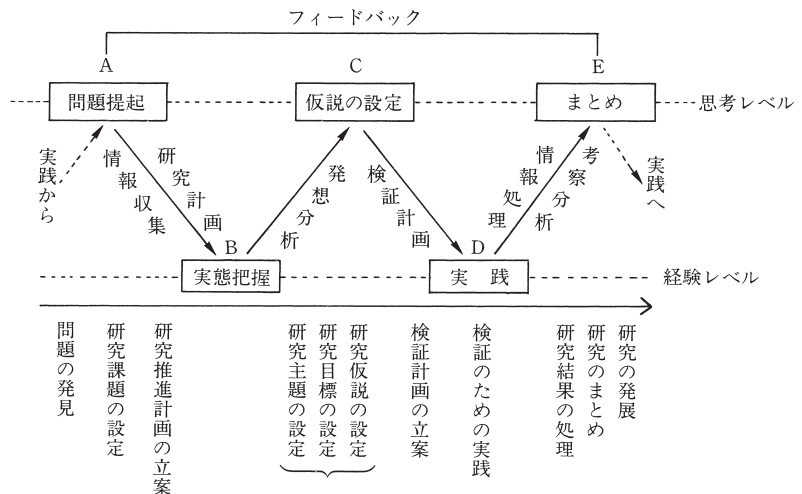


図5 研究方法の特性

ついて、どのような方法で解決するのか、仮説をもって課題解決に当たろうとするものである。まず、実践上の課題を生み出している様々な要因のなかから、教育実践を改善するために、ある要因に着目する。次に、その着目した要因に基づき、課題解決するために研究仮説をもつ。そして、研究仮説として取り上げた内容や方法を具体化して実践する。実践により、その有効性を検証することを通して、実践上の課題解決に当たるのである。

仮説を立て検証する場合は、実践上の課題がある程度はつきりしており、その解決の手がかりとなる要因も予測できる。この要因は子供の成長を促進



研究の内容と方法の構想

図6 仮説を立て検証する研究における一般的過程

するものや阻害するものが考えられる。そして、実践上の課題解決のために、着目した要因を、研究仮説として取り上げた内容や方法によって、よりよく機能させたり、取り除いたりしていくという考えに立っていくのである。(p.31参照)

仮説を立て検証する場合は、川喜田二郎が著書『発想法』で述べている「W型問題解決モデル」を参考にすると、図6のように示すことができる。

仮説を立て検証する場合は、「W型問題解決モデル」の思考レベルと経験レベルを往復する筋道としてとらえることができる。仮説を立て検証する場合は、授業研究や教材開発研究などがある。

川喜田二郎は、科学としての研究方法を「W型問題解決モデル」に示し、書齋科学、野外科学、実験科学の三つの型に分類している。

- 書齋科学：文献・資料を基にして、頭の中で問題提起を行い、推論過程を通して理論的裏付けを行い、結論を導き出す
 - 野外科学：実際に現地調査や資料収集を行い、その結果を分析・考察して法則性を引き出す
 - 実験科学：厳密な条件設定を基に実験を行い、仮説を検証する段階に重きを置く
- 研究を進める場合、研究の内容や方法の違いは、研究の過程のどこに重点を置くかによって分けられる。図7の「W型問題解決モデル」のように、研究という仕事は、比重の違いはあっても思考レベルと経験レベルを往復しながら事実の奥にある本質を

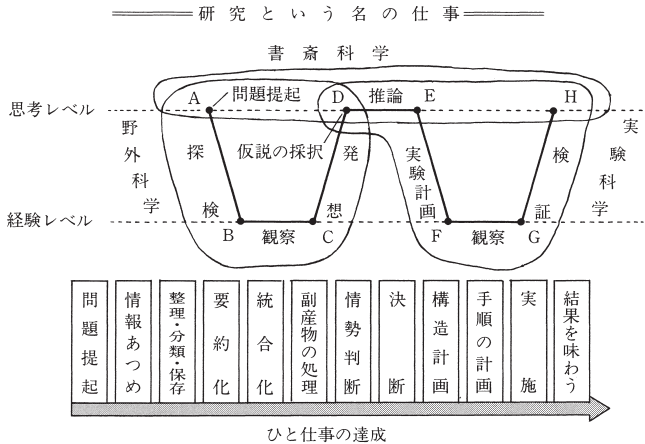


図7 W型問題解決モデル（『発想法』川喜田二郎）

追究し、新しい知識や理論を生み出していく問題解決の行為といえる。

そして、前述した学校における教育研究の方法は、仮説を発想していく段階に重点を置くもの、仮説を検証する段階に重点を置くもの、仮説—検証のすべてにわたって同じ比重を置いて行うものの三つに分けることができる。

さて、「W型問題解決モデル」のA～Hの各過程における研究内容をみると表5のようになる。

表5 W型問題解決モデルの研究過程と研究内容

研究過程	研究内容
A→C	問題に直面した場合、まず、先行例や文献と照合するとともに、問題を多角的に調べ、事実を正確にとらえるようにする
C→D	A→Cの内容を基にして、解決への見通しを設定する。これが仮説であり、仮説にどんなアイデアが盛り込まれるかによって、研究の質が左右される
D→H	仮説が本当に正しかったか否かを、適切な技法を用いることによって検証し、結論を構成していく

2 事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合

事実を読み取り、
意味を見いだす

教育実践上の事実から、様々な要因やその関係、特徴などを明らかにする方法として、事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合がある。事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合とは、教育実践上の事実がどのような要因により生み出されているのか、あるいは、その事実の背景にどのような要因相互の関係があるのかなどを、事実に関するデータを丹念に読み取ることによって明らかにし、その意味を見いだそうとするものである。

まず、課題に成り得るものとして、取り上げる教育実践上の事実をじっくり観察する。そこで、複雑に絡まっている様々な要因のなかから、事実に関するデータを収集する。複数の要因からデータを得て、その関連や構造を分析・解釈していく。さらに、そこから見えてくる構造や特徴などから事実の示す意味を見いだすのである。

事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合は、個別的な事例研究や、学校課題などを明らかにするための調査研究などが考えられる。

特徴として、次のような点が挙げられる。

- 対象とする事実そのものを観察する
- データを収集し、分析する
- 研究者の解釈を重視する
- 得られる資料を総合して検討し、意味を見いだす

また、研究の過程として次のようなことが例示できる。

- (1)問題の選定 (2)研究目的の確認と研究主題の設定
- (3)データの収集 (4)データの整理
- (5)データの分析・解釈 (6)結果のまとめ

IV 具体的に研究を進める

仮説を立て検証する場合と、事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合の研究の進め方について主な過程とその要点を示す。

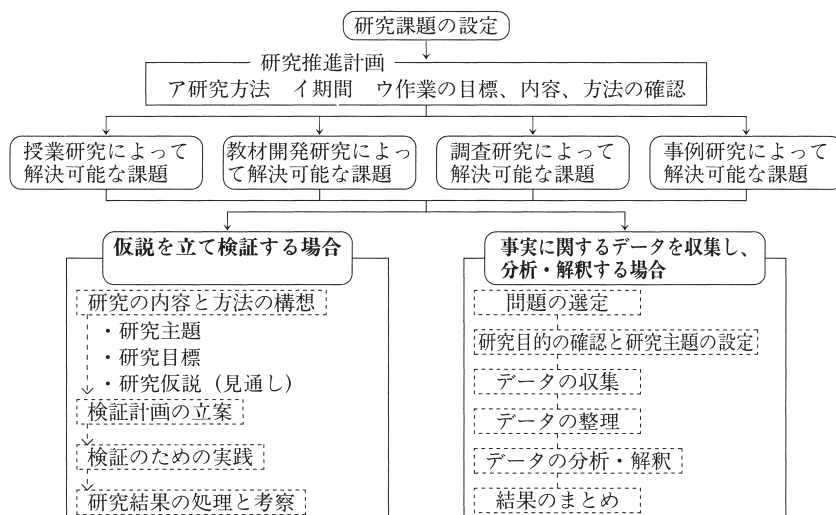


図 8 実践的研究の具体的な研究過程の例

(イ) 研究の方向性を吟味する

目指す資質や能力
を焦点化し、具体
化する

研究課題を解決していくためには何を指していけばよいのか、研究課題がもっている特徴や内容を明確にしていくことが大切である。実践的研究を行う意義の一つは、子供の資質や能力の育成にある。どのような資質や能力の育成を目指すのかを焦点化し、具体化していくことにより、その研究の方向を明らかにしておくのである。

例えば、授業研究において「数学的な見方や考え方やそれを育てる態度」の内容を表6のように分析し内容を具体化して、研究の方向を明らかにしていく。

表6 「数学的な見方や考え方やそれを育てる態度」の内容の分析例

項目	包含内容	
数学的な見方や考え方	数学の方法に関するもの	帰納的な考え方、類推的な考え方、演繹的な考え方、統合的な考え方、発展的な考え方、抽象的な考え方、単純化の考え方、一般化の考え方、特殊化の考え方
	数学の内容に関するもの	単位の考え、表現の考え、操作の考え、アルゴリズムの考え、関数的な考え、式についての考え
数学的な見方や考え方を育てる態度	<ul style="list-style-type: none"> ○ 事象の中から数学的な問題を見付けようとする ○ 見通しを立てようとする ○ 思考を具体的思考から、抽象的思考に高めようとする ○ 自他の思考とその結果を評価し、洗練しようとする 	

(『数学的な考えの具体化』片桐重男より作成)

(ウ) どのような分野・領域で研究を進めるかを吟味する

研究課題に取り組
むために焦点化、
具体化する

研究課題を解決していくために、焦点化し、具体化することによって目指すものは、どのような分野・領域で実現できるのかを検討する。教育課程の改善が研究課題であれば、そのどこに着目するかを検討する。

この段階で研究として取り組む分野・領域を焦点化するために、調査を行うこともある。また、今日的な教育課題をとらえるために文献研究をしていくこともある。このような検討によって、学年・学級経営などの領域を研究課題として取り上げていくことができるのである。

教科等であれば、年間指導計画や教科の中の単元・題材レベルで分野・領

域が焦点化される。

(エ) 課題解決するための方法を吟味する

繰り返し吟味し、
焦点化する

方法の吟味は、研究課題を解決するために、目指すもの（ねらい）や、研究対象の分野・領域を踏まえながら行う。

ここに挙げた(ア)～(エ)は、関連し合って焦点化し、具体化していくものである。したがって、繰り返し吟味し、焦点化していくことが大切である。

図9は、授業研究を例に、その関連を示したものである。

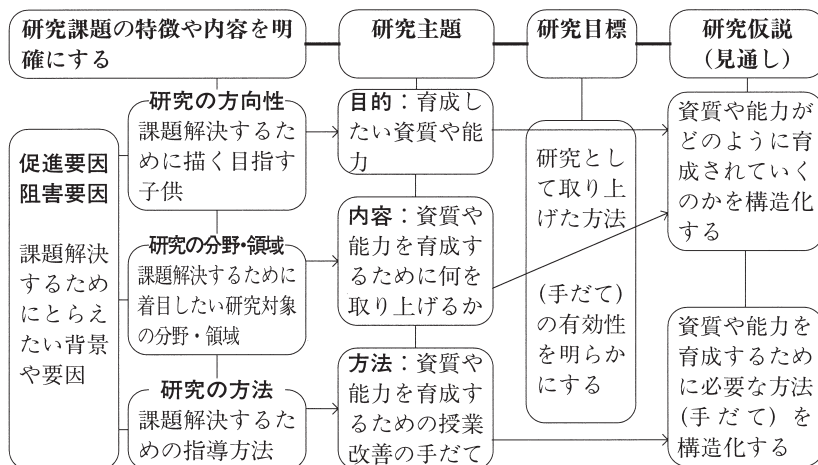


図9 授業研究において仮説を立て検証する場合の「内容と方法の関連」

(2) 研究主題の設定

ア 研究主題設定の意義

研究に方向性を与える

研究主題は、その研究がどのような教育を実現しようとしているかを示すものである。

つまり、どのような教育を構想し、実践しようとしているかという意味で、研究の顔としての重要性を秘めているとともに、研究に方向性を与え、研究の羅針盤としての役割をもっている。研究主題を基に、どのような研究の目標や仮説を設定したらよいかというイメージを描くことができる。その意味

で、研究主題には、研究の全体像を発想していく機能がある。

研究主題を設定することで、研究として取り上げる内容・方法を絞り込み、研究の方向性、研究対象の分野・領域、方法を明確にすることになるのである。

□ 共同研究を行う場合に研究主題を設定することは、前述したもののほかに次のような意義がある。

- ・全教師の共通理解の下、協力して主題についての研究を深めることができる
- ・学年の発達段階の把握、長期的な子供の変容、全校態勢による研究課題の追究などができる
- ・研究組織の編制、研究方法の構想が計画的にできる

イ 研究主題に必要な条件

目的、内容、方法を示す

どこまでの内容を範囲とするのか、どのような方法、方針で行うのか、緊急に解決すべきものは何か、研究に使える時間、予算など研究を支える条件等を集約し、研究の目的、内容、方法を示すものが研究主題となる。

- 研究に方向性を与えていくもの [目的]
- 内容構造が具体化され、焦点化されているもの [内容]
- どのような方法をとるか明らかにされているもの [方法]

ウ 研究主題の吟味

ア) 吟味の必要性

構造をはっきりさせる

研究主題は、研究の課題が凝縮されているとともに、その課題解決へ向けた発想のエネルギーとなることが期待される。そこで、意義ある研究を行うためには、これから行おうとする研究の構造を、はっきりさせておかなければならない。そのためには、研究主題の中にある重要語句（キーワード）の意味をしっかりと分析し、吟味してみる必要がある。授業研究では、

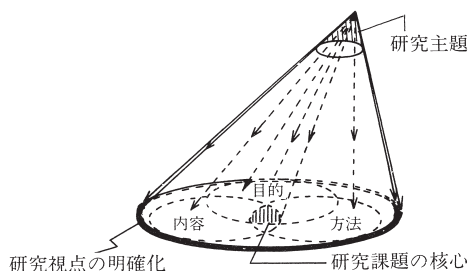


図10 研究主題の働き

「研究主題に込められている教育は、どのような内容をもつものか。子供を変えるためには、どのような授業を行ったらよいか。目指す授業に対して、どのような文献研究を行ったり、資料を集めたりしたらよいか。どのような実地調査を行ったらよいか。」など、具体的吟味を行うことである。言い換えると、研究主題は、研究の目的、内容、方法について、豊かな発想のエネルギーとして生きて働く力となる。

研究主題は次のようなことを吟味して設定する。

- 研究を通して求めたい実践の在り方を考え、研究課題がもっている特徴や内容を明確にする
- 子供の成長への願いを基に、育成したい資質や能力を明らかにする
- 子供の実態や地域の実態などから促進要因や阻害要因を分析する
- どのような方法で研究を進めていくのかを考え、基本的な構想を立てる

(イ) 研究主題の表記

集約して構成する

研究主題は、研究の目的、内容、方法を集約して構成する。

- 用語の概念を明確に把握して表現する
- 明確で、具体的な内容を盛り込んで表現する
- 一般的に、主題文は、研究の目的や研究対象を論理的、構造的に把握した内容を主体に構成する。副題は研究の具体的手だての構想を主体に構成し、一読できるくらいの長さにまとめる

研究主題の表記例

- 研究の目的や研究対象を論理的、構造的に把握した内容を主題に、研究の具体的手だての構想を副題に構成したもの
「英語による主体的な表現活動を促す指導の工夫」
—プレゼンテーション支援教材の開発とその活用を通して—
- 研究対象が手だてそのものである場合で、指導の手だてを主題に、ねらいを副題として構成したもの
「問題解決的な学習の在り方」
—小学校理科において、自然の事物・現象を関係付けることのできる児童の育成—
- 研究対象が複数ある場合で、中核的な対象を主題に、他の対象を副題に構成したもの（それぞれが同等な対象になっている場合には、いずれかを

主題に、他を副題に入れて、研究主題を分かりやすいものにする)

「思考力を育成するための学習課題の在り方に関する研究」

一個に応じた指導方法に着目して—

- 数年にわたり年次ごとに研究対象を換える場合で、年次ごとの対象を明示して副題として構成したもの

「自分のよさを生かし、表現する喜びを味わう国語科指導の工夫」

第1年次 子供のよさを発揮できる教材の開発を通して

第2年次 子供のよさを生かす指導方法の改善を通して

第3年次 子供のよさを生かす評価の工夫を通して

- 総合研究主題を設定した場合で、焦点化した対象などを副題として取り入れ構成したもの

総合研究主題「意欲的に取り組み、追究し続ける子供を目指して」

—コース別学習を取り入れた理科の指導を通して—

(3) 研究目標の設定

ア 研究目標設定の意義

内容や方法、検証
計画を具体的に

研究目標は、この研究で何を明らかにし、何を追究しようとするのか示すものである。研究目標の設定は、研究の具体的方向性や、研究の目的に迫る観点を示し、研究の内容や方法、検証計画をより具体的にすることができる。

イ 研究目標の役割

研究目標は次のような役割がある。

- 研究の推進に方向を与える
何を考察し、何を実施しなければならないのか吟味したり、推進している研究の方向を確認したりするための指針となる。
- 研究のゴールを示す
研究の結果を考察する際に、最終的には研究目標が達成できたかどうかを検討・吟味して研究の評価を行う。
- 検証計画の内容を方向付ける
- 研究目標の明確さが研究内容の確かさを示唆する
研究目標は、研究主題で示した育成したい資質や能力、内容、方法を基に、

研究で明らかにすることを明確にする。

ウ 研究目標設定上の留意点

研究目標を設定する際には、次の点に留意する。

- 研究対象の分野・領域を限定し、焦点化して研究目標を明確にすること
例えば国語科において、次のように研究対象の分野・領域を焦点化する。

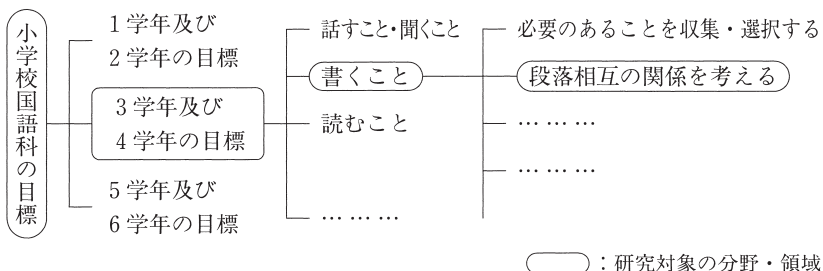


図11 国語科における研究対象の焦点化（例）

- 目的、内容、方法を盛り込むこと（表記の順序性はない）

これらを踏まえ、研究目標は、次のように表すことができる。

<例1> △△△において（内容：研究対象の分野・領域）○○○○に
するために（目的：目指す姿）□□□□することの（方法：投入条件）
有効性を明らかにする。

小学校国語例：（p.166実践例2）

書くことの指導において、よりよく表現したい、確かに表現したいという意欲を高め、喜んで書く子を育てるために、書く事柄の順序を整理し、段落や段落の続き方を楽しみながら考えて書くための「まんがシート」を取り入れたことの有効性を明らかにする。

<例2> △△△において（内容：研究対象の分野・領域）□□□□を
すれば（方法：投入条件）、○○○○になること（目的：目指す姿）を
実践を通して明らかにする。

図画工作例：（p.172実践例3）

鑑賞指導において、美術作品を仲間分けによって比較したり、気に入った美術作品の特徴をまねて自分なりに工夫した作品を製作したりすれば、見方や感じ方が深まり美術作品に親しむことができることを実践を通して明らか

にする。

(4) 研究仮説（見通し）の設定

ア 研究仮説（見通し）の意義

場・内容・投入条件・期待される結果を具体化するために

本書では、研究仮説は、研究の見通し、または、予測ととらえる。

研究で大切なのは、見通しをもって進めることである。研究の見通しをもつということは、その研究における手だてなどを具体的に設定するということである。研究仮説を立てることにより、研究の場・内容・投入条件・期待される結果などを具体化することができる。

イ 研究仮説（見通し）の役割

研究仮説は次のような役割がある。

- 研究の内容と方法及び特徴を明確にする
- 研究の構想を実践に向けて具体化し、その方向を明示する
- 検証計画の内容と方法を定めることによって、検証資料の内容構成、得られた資料の処理やその技法などに示唆を与える
- 研究仮説は、検証を通して研究を評価する重要な要素となる

ウ 研究仮説（見通し）設定上の留意点

研究仮説は、研究の出発だけでなく、研究の過程に即して研究推進の方向や資料収集の方向、研究のまとめを示唆する大切な働きをもつので、以下のことに配慮して設定する必要がある。

- 綿密な実態分析に基づいて、今までの指導方法を見直す
- これまでの研究や実践による既知の事実や理論とずれがなく、合理的、論理的である
- できるだけ端的で分かりやすい用語で述べる
- 研究仮説は一般的に次のように表現される

「○○において、○○することによって、○○になるであろう」

A

B

C

Aは場・内容の限定、Bは投入条件（方法）、Cは期待される結果（目的）を示す。

(5) 検証計画の立案

ア 検証計画の意義

実践に先立って、
見通しをもつため
に

検証は、子供がどのような方向にどのように変容したかを事実に基づいて確かめることである。それは、研究の方法が有効なものであったか判断することである。そのためには、確かな検証を可能とする資料の収集と検証方法の選定が必要である。それは、研究の実践に先立って、見通しをもった計画を立てることによって可能になる。

イ 検証計画立案の方法

(ア) 研究の目的・内容・方法の確認

研究の目的・内容・方法は何か。例えば、教材開発研究においては、「使用する教材のどのような点を改善・充実するために教材開発を行うのか」「どのような内容が教材開発の中核になるものか」「その教材開発をどのような方法で行うか」などを確認し、その教材開発が目標の達成に有効に作用したかを検証できるよう計画を立てる。

(イ) 検証計画立案の留意点

検証計画を立てるに当たっては、次の点に留意する。

a 検証の観点

何に着目し、何を検証するのか明確にする

b 検証の場面・方法の明確化

どこでどのような検証方法を用いて検証するのか実践計画に位置付ける

c 処理と解釈の方法

評価規準の構想、検定方式の選定、検証資料の整理の仕方など、検証の内容と方法は、研究の特徴と研究仮説の明確化によってある程度決まってくる。それらの内容や方法をさらに分析し、いろいろな視点から検証が行えるような工夫が必要である。

(6) 検証のための実践

ア 検証のための実践の意義

取り上げた方法の有効性を明らかにするために

検証のための実践は、研究として取り上げた方法が子供の変容にどのような効果をもたらしたか、その方法の有効性を明らかにすることである。取り上げた手だてを投入して授業実践したり、開発した教材を実際に活用して意図した効果が発揮できるかどうかを実践したりして検証する。

イ 検証のための実践を進めていく上の留意点

- 教育本来の目的を優先する
例えば、授業研究において、研究仮説の検証を優先するあまり、目の前にいる子供の姿を軽視してしまったり、資料収集を強いたりするなどは、絶対にしてはならないことである。
- 研究の投入条件は何かを明確に把握し、導入する
- 資料収集は、目的・内容・方法などを具体化して行う
- 資料収集は過不足なく行い、子供に過度な負担をかけないようにする

(7) 研究結果の処理と考察

ア 研究結果の処理と考察の目的

研究仮説の有効性を判断する

研究結果の処理は、研究仮説の適否を事実によって検証し、その有効性を判断する資料を得ることである。また、研究の提言性を事実によって示すための根拠を得ることである。

研究結果の考察は、研究仮説の検証で得た資料により、その有効性を検討し判断することである。

イ 研究結果の処理と考察の留意点

処理と考察を進めるに当たっては、次の点を踏まえる。

- 仮説を検証することによって得られた事実を、質的・量的な面から示す
 - ・質的（個の変容の把握）な示し方は、観察記録などにより、個別的な事例をデータとして処理して行うものである。データは過程を把握でき、具体性、多義性があり事実をとらえやすいので、その事実を基に深く考察したり、総合的・多次的に把握したりすることができる。
 - ・量的（科学的、客観的把握）な示し方は、その方法（手だて）によって変容がどれだけ得られたかを量的に処理して行うものである。変容に関するデータを数量化し、統計的処理によって客観化して示す。
- どこまでが事実で、どこからが研究者の考えや推測かを明確にする
- 仮説を肯定する事実だけでなく、肯定も否定もしない事実や否定する事実も取り上げて考察する

2 事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合

(1) 問題の選定

事実を読み取る手がかりを得る

この研究は、目前の教育事象にどのような意味があるか、また、その要因はどのようなものか、とらえるために行うものである。その際に、自己のそれまでの経験や理論を基にしたり、社会の要請などから手がかりを得たりして、問題を選定し研究を始める。この問題の選定により、どのようなデータを収集したらよいかを見いだしていく。

問題を選定する際には、次の点に留意する。

- 教育事象の何に着目しようとしているのか、視点をもつ
 - 例えば、休み時間の子供の様子から、「子供の学校生活の在り方」を問題とする。
- 問題は個別的なことであるか、集団的なことであるか、およその見通しをもつ
 - 例えば、「子供が気持ちよく朝のあいさつをすることができない」のは、個別的な問題なのか、学校全体の問題なのかによって、その後のデータの収集の仕方が異なってくる。

(2) 研究目的の確認と研究主題の設定

明らかにしたいことは何か

選定した問題は、事実や現象を基に何を明らかにしたいのか、研究目的を確認することが大切である。

研究の基盤になるものは、子供理解を深めたいという教師の願いである。そして、子供理解を深めることを直接の研究目的にしたり、子供理解を深めることによって明らかにしたいことは何か、例えば「教育課程を改善するために」「不登校という子供の事実を理解するために」を研究目的にしたりするのである。

研究主題は、研究目的を達成するため、何を対象にして、どのくらいの範囲とするのか、どのような方法・方針で、どのようにデータを収集していくか、などを整理したものである。

(3) データの収集とその留意点

事実を読み取り、データを得る

データは、選定した問題に関する資料として、すでにあるものを活用したり、新たに観察や面接などによる調査を実施したりして得る。

データの例として、子供の行動や周囲の環境に関するもの、子供や教職員、地域の意識などが挙げられる。

データの収集に際しては、以下の点に留意する。

○ 質的に把握する、量的に把握する

質的に把握するデータは、主に、個別的にももの見方・考え方などの変容からとらえたり、時間的な経過による変容からとらえたりして得ていくものである。

量的に把握するデータは、主に、集団から、ある内容についての資料を得ていくものである。収集したデータは、統計的処理によって対象範囲の傾向などをとらえることができる。

○ 個別的な情報の収集に当たっては、プライバシーや人権の保護を優先する

○ 研究者自身が対象と直接かかわりながらデータを収集する際には、研究

対象や結果に影響を与えないよう配慮する

(4) データの整理

データの示す意味
を見いだすために

収集したデータの中には、内容の整理が必要なものと、統計処理が必要なものがある。データの整理においては、次のような点に留意する必要がある。

- 資料は、事実や現象を示しているものか、事実や現象から類推した結果を示したものかなど、どのようなことを示しているのか明らかにして整理する
- 目的や必要に応じて、時間の経過に沿って整理したり、対象者の属する条件（年齢などの特質）などによって整理したりする
- 統計処理が必要なものは、適切な処理方法で整理する

(第2章第4節参照)

(5) データの分析・解釈

データが示す意味
は何か

問題とする事実や現象にとって、データはどのような意味をもつのか、その示す意味は何かを分析・解釈する。その際に、すでに一般化されているとらえ方から見て、そのデータが示す意味を検討することが大切である。

データを分析・解釈する際には、以下の点に留意する。

- データが、問題の意味や要因をとらえる根拠となり得るものとなるために、データとして取り上げた理由を、理論的背景や事実から明確にしておく
- 複数のデータを取り上げ、相互の関連や構造を踏まえて分析・解釈する
- 研究者としての立場を明確にして、推定したり因果関係を構築したりするなどにより、個人的な見解で分析・解釈が偏らないようにする

(6) 結果のまとめ

見いだした意味を
まとめる

選定した問題にかかわる資料を収集し、分析・解釈したことにより、見いだした意味をまとめる。

その際には、次の点に留意する。

○ 問題について、データを基に分かった事実やその要因・背景を示すようにする

○ 事実や要因・背景を通して、問題について研究者が見いだした意味を示すようにする

データが同じでも、研究者が異なればそこから見いだす意味は異なってくる。それは、研究者の関心や理論的枠組みが異なっているからである。

ここに、事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合の特質がある。

研究者の関心や理論的枠組みによって問題に着目し、データを収集し、整理、分析・解釈するといった一連の取組から見えてきた意味は、その条件によって見える事実やその意味を価値付けることになる。その際、その意味を第三者にも理解できるよう、まとめていくことが大切である。

V 研究の過程に応じた資料収集と研究技法の選定

1 調査・資料収集

(1) 調査・資料収集の意義

内容や特徴を把握し、基盤とするため

調査や資料収集は、研究対象となる教育課題の内容や特徴を把握したり、研究を支える理論や事実に基づく研究を実証したりするための基盤となる。

実践的研究においては、視点を明確にし、研究の過程に応じて効率的な資料収集を行うことが大切である。

(2) 調査・資料収集の視点

調査や資料収集を行う際には、次の視点を明確にして行うことが重要である。

○ 何のために行うのか（調査目的の明確化）

(例)・教育課題の明確化 ・研究課題の設定 ・子供の成長の促進要因、阻害要因の発見 ・子供の変容の様子や研究仮説の有効性 など

- 何を調べるのか（調査すべき目標及び調査対象の明確化）
 - （例）・子供の学力、行動特性など ・学校の環境 ・地域の環境 ・研究の検証のための資料の収集、整理、分析、考察、解釈などの在り方 など
- 何で調べるのか（用具及び内容的確化）
 - （例）・調査の目的、目標に見合った観察の観点、調査項目、調査内容、調査問題などで構成 ・研究仮説に基づく期待される結果がとらえられる内容などで構成
- いつ、どこで調べるのか（時期及び場面的確化）
 - （例）・日常の教育実践の中で収集、累積 ・研究課題の設定に先立って収集 ・研究の方法の構想と検証計画の作成の前 など
- どのように調べるのか（用具と方法的確化）
 - （例）・文献の収集とその研究 ・先進校の研究資料の収集とその研究 ・教育実践の反省や実践記録等の収集と整理、分析、考察、検査、調査など
- だれが行うのか（調査主体及び記録者、資料作成者の明確化）

(3) 調査・資料収集上の留意点

- 研究推進計画、研究目標、研究仮説及び検証計画を基に、内容、用具、方法などを精選すること
- 必要に応じて立ち返ったり、考えを修正したりという姿勢をもつこと
- 調査や資料を収集することが子供の学習の障害要因にならないようにすること

2 研究技法の選定

研究技法を選定する際には、研究の展開に応じて、次のような点に留意する。

- 一つの事象をとらえる場合でも、いくつかの技法を相互に関連させながら活用し、いろいろな側面から事象をとらえること
- 各段階で研究に本当に必要なものは何かということを考えて精選すること

技法を選定して使用することにより、何を知りたいのか、得た結果をどのよ

うに利用したいのかなどをしっかりと認識する。技法の違いにより研究の内容や方法に微妙な違いをもたらす場合がある。

- 研究の次の段階やその先の段階を見通して技法を選定するとともに、一つの技法で得られた結果が多様な場面で利用できるようにすること
- 研究の目的、内容、方法などに応じた技法を選定するとともに、教師の創意工夫を働かせ、よりふさわしい技法を用いて実施すること
- 自分で調査表や問題などを作成する場合には、その内容や方法、あるいは評価基準などの妥当性や信頼性に配慮し、偏ったものにならないようにすること
(第3章参照)

VI 成果と課題をまとめ、実践にどう生かしていくか

1 研究のまとめ

(1) 研究のまとめの意義

成果と課題を明らかにし、研究の価値を確認するため

研究のまとめは、成果と課題を明らかにし、研究の価値を確認することである。一般化できたり、追跡研究ができたりすることが実践に生きる研究である。研究をまとめる際には、次のような視点が大切である。

(2) 研究のまとめの視点

- ア どのような願いをもち、何を探ろうとしてきたか
- イ 研究目標の追究にどのような研究の方法を講じてきたか
- ウ 実践による検証やデータの処理によってどのようなことが分かったか
- エ 研究目標の何が追究できて、何が未解決の問題として残されたか
- オ 研究主題のもつ課題は追究できたか

2 研究の評価

(1) 研究過程における評価の観点

実践的研究は、らせん的な進行過程を経ながら進展し、深まっていく。つ

表7 研究過程における評価の観点（仮説を立て検証する研究の例）

過程	評価単位	評 価 の 観 点
課題把握	課題のとらえ方	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子供の実態から把握した切実なものか ○ 教師の実践のつまずきや反省の吟味はどうか ○ 学校の教育目標や学校課題に結び付いているか ○ 文献や理論が生かされているか
計画	研究の妥当性	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研究推進計画は適切であるか（日程・作業・内容・手順等） ○ 研究組織は学校の実態や教師の特性を加味したものになっているか ○ 研究計画は柔軟なものになっているか ○ 研究成果を生かす計画が立ててあるか
主題	研究主題の設定と妥当性	<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題を十分に分析し、焦点化・具体化した主題であるか ○ 実践上の必要性・緊急性を踏まえた主題であるか ○ 解決の意欲もてる主題であるか ○ 研究期間や組織の実態などを考慮した主題であるか
目標	研究目標の設定と妥当性	<ul style="list-style-type: none"> ○ 明確で、具体性をもった目標になっているか ○ 学校課題を解決し、学校の教育目標を達成するのに関連深い目標になっているか ○ 実践に役立つ目標になっているか
内容・方法	研究の内容・方法の妥当性	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研究の内容・方法の構想は適切であるか (研究者の基本的な考え方、研究の内容・方法等) ○ 子供の成長への願いや、研究で用いる用語に対する考えが絞り込んであるか
仮説	研究仮説の設定と妥当性	<ul style="list-style-type: none"> ○ 仮説は焦点化し、具体化してあるか ○ 文献や子供の実態を把握し、仮説設定の根拠付けがしてあるか ○ 仮説の構成要素を分析し、検証に耐えうるものであるか
検証計画	検証計画の設定と妥当性	<ul style="list-style-type: none"> ○ 何を検証するのか、検証目標の分析や観点が明確なものになっているか ○ 検証資料の収集場面や収集のための方法が具体化してあるか ○ 検証資料の処理やその解釈の方法が明確になっているか
実践	研究実践過程の妥当性	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子供をいかにするという配慮の下に進めたか ○ 研究の内容と方法を適切に組み合わせて進めたか ○ 研究経過を常に評価しながら目標に即して進めたか ○ 検証のための資料収集の方法や用具が整えられ、正確に記録してあるか
研究のまとめ	研究成果の妥当性	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子供がどのような条件で、どのように変容したかを明確につかんだか ○ 仮説に見合った考察や、事実と推測とを区別した考察を行ったか ○ 解明された点や残された問題点が明らかになったか ○ 研究記録のまとめ方が適切であったか ○ 結果は、今後の教育実践にとって、どのような価値をもっているかが明らかにされたか
発展	研究成果活用の妥当性	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研究成果の活用に向かって努力を行ったか ○ 研究成果の上で、研究を継続・発展するための方向付けを行ったか

まり、研究の計画・実施・成果のまとめという一連の過程における評価を重視し、目標や計画を確認しながら、研究を進めていくことが重要である。そのためには、研究の過程において、その推進状況を常に評価し、修正していく必要がある。(p.47表7参照)

(2) 研究過程における評価の記録

問題点を把握し、
今後に役立てる

研究過程における評価の方法には、自由記述法、評
定尺度法など様々なものがある。表7の観点に基づき、
これらの方法を用いて行った評価は、それを整理し記録しておくことが大切
である(表8参照)。それは、整理の段階で、研究を推進していく上での問
題点や今後の方向などが明確になるからである。

表8 研究過程における評価表(例)

評価の観点	評価尺度	問題点の把握	改善点
子供の実態から 把握した……	1 2 3 4 5 └──┬──┬──┬──┘		
教師の実践の…	1 2 3 4 5		

3 研究の発展

(1) 研究成果を实践に生かし、成果や課題の深化・拡充を図る

研究成果を实践に生かすことにより、その研究の意義が生まれる。図12は、研究成果を实践に生かす過程を示したものである。

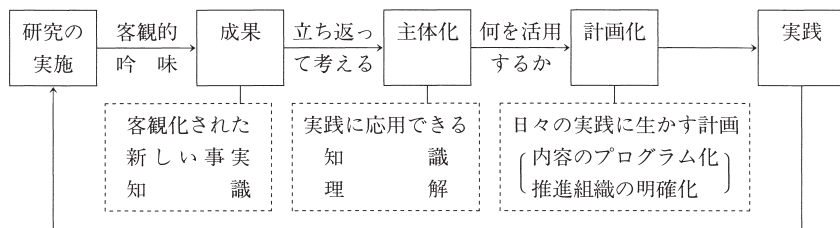


図12 研究成果を实践に生かす過程

(2) 研究成果を实践に生かすための留意点

研究成果を实践に生かすには、次の点に心がける必要がある。

- 教師一人一人が、研究成果を実践に生かすよう意識し、主体的に活動する
- 研究の過程においても、絶えず研究が教育実践に役立つかどうかを吟味しながら進める

(3) 研究成果を実践に生かす方法

研究成果を実践に生かすためには、研究で明らかになった事柄や有効であった点を、自校や自己の実践上の課題解決に結び付けて活用することが大切である。表9は、研究成果を

表9 研究成果を実践に生かす方法

観 点	生 か す 方 法
組織上の面から	・実践で効果があったものについては、学年・教科などで相互に活用例を交換し合う
内容上の面から	・自校や自己の実践を見直し、弱点や欠点の補充、強化策の示唆を得るために活用する ・教育活動を充実する目的・内容・方法などの示唆を得るために活用する
記録上の面から	・研究の成果は、記録にまとめて、活用が図られるようにする ・個人研究の成果も記録にまとめて、活用が図られるようにする ・研究主任などを中心に「研究だより」「研究情報」を作成し、活用が図られるようにする ・研究記録や研究資料は図書室や職員室などに常備し、いつでも、だれでも利用できるようにする ・各種資料・授業研究会の記録などはセットにして保存し、活用が図られるようにする

実践に生かす方法を観点別にまとめたものである。

4 研究の累積と発展課題

(1) 研究の累積の必要性

絶えざる研究心と情熱に支えられた研究の積み上げ

実践的研究は、研究において明らかになった点や、実践に役立つ点を明確にする。しかし、一方では、追究しきれなかった点が残ったり、新たに課題が生じたりする。

したがって、教育実践上の課題がある限り、学校や教師は絶えざる研究心と情熱をもって研究を積み上げていくことが必要である。図13は、学校における教育研究の累積の手順を示した例である。

このように研究の過程において、常に評価を行い、軌道修正しながら研究を積み上げていくことが大切である。

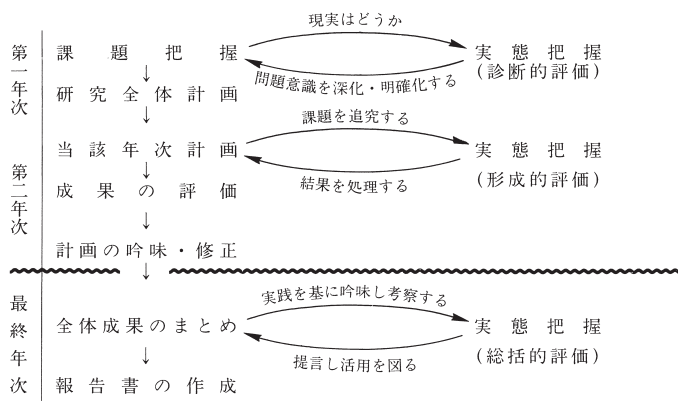


図13 学校における教育研究累積の手順（『現代教育評価論』梶田叡一より）

(2) 発展課題の把握

研究の結果、新たに生じた課題を的確に把握し、研究を積み上げていくためには、常に次の視点で課題をとらえることが大切である。

- 重要性：学校や子供のためにその解決が大きな価値あるものであるか
- 緊急性：学校や子供のためにすぐに解決しなければならないものか
- 課題性：学校の教育目標などとの関連で今日の課題をもつものか
- 社会性：社会がその解決を求めているものか
- 地域性：学校を取り巻く地域の課題として、特に取り上げる必要性のあるものか
- 可能性：研究にかけられる時間からみて、特に取り上げる可能性のあるものか

5 論文の作成

(1) 論文作成の重要性

論文は、研究の結果をまとめ、成果と課題を確認するとともに、対外的に意見や助言を仰ぐためのものである。研究者自身が論文をまとめることによって、研究のポイントを再確認し、研究をより確かなものにしていくことができる。また、論文を媒体にして、他者の批判や意見を聞くことによって、研究をより前進させることができる。

(2) 論文の備えるべき条件

論文は、右記のような条件を備えることで、提言力をも

○価値 ○独創性 ○一般性 ○実証性
○実用性 ○発展性 ○論理性 ○平易性

つ。そのために大切なことは、論旨を明確な論の展開の下、何のために、何をどのように解明したかがよく分かるように書き表すことである。それには、論文の構想・叙述を工夫することが必要である。

(3) 論文の構想と叙述上の留意点

ア 正確で分かりやすいこと

論文は、問題をどのようにとらえ、どのように追究し、どのような結果が認められたかという、研究の全体が「正確に分かりやすく」述べられていることが大切である。文章の巧拙よりも、筋道立てて正確に記述することを主眼にすることが大切である。

論文は、研究の内容、方法、強調点の置き方、読み手への配慮など様々な条件を考慮して書かれる。形式だけが整ったものは説得力がなく、それを無視したものは理解しにくい。研究の中身に応じた形式と表現で「読んだ人が分かる」ように工夫する必要がある。

イ 構想を練ること

構想に当たっては、次の手順を踏む。

(ア) 研究の意図を明確に自覚し、「何を言おうとするか」「それをどのように提示するか」について吟味し、論文で表す内容の範囲をおさえる。

(イ) 範囲を決めたら、諸々の素材を踏まえ、中心点をどこにおくかを確認し、それと関連付けて組立てを考え、構想メモを作る。

実践的研究の場合、諸種のデータやそれらから得られた新たな認識が集積される。それらを、適切な箇所に配置することによって論文の説得力が高まる。そのため、どの材料をどのように肉付けして叙述すると生きた論文になるか検討し、思い切った取捨選択と重点化を図ることが実証性を高めることになる。

表10 仮説を立て検証する研究における論文の形式（例）

組 立 て	記 述 内 容 と 留 意 点
①研究主題	副題を含めて、研究内容が想定できるような簡潔な表現にする
②概要	どのような研究内容なのか、研究でねらおうとしていること、研究問題の範囲、研究の方法、研究の結果などについて概略を述べる
③研究主題設定の理由	子供の実態や教科の本質等を踏まえて、研究を取り上げた理由、主題のもっている価値等について明快に述べる この前に、学校の概要について項立てて述べる場合もある
④研究の目標	研究で明らかにしたいこと、追うべきことについて述べる
⑤研究の仮説 (研究の見通し)	検証などによって明らかにしようとする見通し（基本的な考え方や手だて等）について述べる
⑥研究の計画と方法	研究の計画や方法について表などを使って簡潔に示す
⑦研究の内容	研究の内容と実施の様子（検証のプロセスの内容等）について具体的に述べる
⑧結果と考察	事実—考察という観点で述べる。取組によって得られた資料をこのように分析した結果、このような事実が分かったというように研究で取り上げた内容やその取組によって生じた事実について考察する
⑨研究のまとめ	研究で解明された点を明確に述べる これまでの研究結果との相違点や新しい事実を明確にする 研究で残された課題について、研究の内容や方法などから明確に述べる
⑩資料・文献	研究に引用した資料・文献を挙げる。引用文献と参考文献を区別して記述する

ウ 明快な叙述

論文は、論旨、論拠が明確で、表現が平易であるとよい。いつも、構想メモを手がかりにし、文法上、論理の通った文を用いてまとめていく。明快な叙述の条件として留意したい点は次のとおりである。

(ア) 段落の充実

一段落に一つの小主題があるようにすれば、段落の内容が明確になり、全体の構造もしっかりする。段落内では、叙述の中心を初めと終わりに置くなど読みやすさを工夫する。具体例だけでは論は深まらないし、抽象的な論の展開だけでは内容がつかめない。具体化と抽象化を適宜工夫しながら論を進めていく。

- ・論の中核を構成している各部分について、適宜に詳しく検討、論証することも説得力を強める。
- ・段落構成は、絶えず研究主題に立ち返れるよう工夫する。

(イ) 読みやすさのために

- ・文や段落の長さは短くまとめる。
- ・主語・述語など文の関係、語句の係り受けに乱れないようにするとともに、指示語、接続語の適切な用い方に留意する。
- ・読み手の理解を助けるために、図表、さし絵、写真、数式などを工夫して用いる。
- ・用語は、平易で一般的なものを用いる。専門用語も読み手に配慮して使用を抑制し、必要な場合は明快な概念規定の下に用いることが望ましい。

(ウ) 推敲

主題が筋道よく展開されたか、文法、文字、仮名遣いの誤りや誤解されそうな表現はないか、などについて重ねて推敲することが大切である。また、自分に都合のよい事例だけを挙げて逆の例を省いたり、他の人の論を借りてきて自分の考えとして論を進めたりするようなことがあってはならない。

参考文献

- | | | |
|--------------------------|-------------|---------------|
| 『発想法』 | 川喜田二郎 | 中央公論社 (1967) |
| 『学校のための教育研究法』 | 藤原藤祐 | ぎょうせい (1989) |
| 『スクールリーダーのための学校改善ストラテジー』 | 中留武昭 | 東洋館出版社 (1991) |
| 『新訂校内研究のすすめ方』 | 福岡県教育研究所連盟編 | 第一法規 (1991) |

『教育実践の原理』	高久清吉	協同出版 (1970)
『教育実践学』	高久清吉	教育出版 (1990)
『自己の研修に生かす校内研修』	新谷敏夫編	教育開発研究 (1976)
『現場のための教育研究法』	小野寺明男	新光閣書 (1967)
『教育学入門 (上)』	村井実	講談社 (1976)
『校内研究事典』	奥田真丈監修	ぎょうせい (1984)
『わかる授業の心理学』	北尾倫彦・速水敏彦	有斐閣 (1986)
『個性を育む』	日俣周二・牧田章編著	東洋館出版社 (1992)
『個性の発達と心理学』	高野清純編	教育出版 (1989)
『教育評価 (第2版)』	梶田叡一	有斐閣 (1992)
『教育研究のすすめ方・論文のまとめ方』	福岡県教育研究所連盟編	第一法規 (1981)
『個を生かす教育の実践』	全国教育研究所連盟編	ぎょうせい (1992)
『子どもは創る (上・下)』	全国教育研究所連盟編	ぎょうせい (1989)
『教育研究法』	宗像誠也	新評論社 (1954)
『質的研究法による授業研究』	平山満義編	北大路書房 (1997)
『〈社会〉を読み解く技法』	北澤毅・古賀正義編著	福村出版 (1997)
『数学的な考えの具体化』	片桐重男	明治図書出版 (1988)